

國學院大學学術情報リポジトリ

令和3年度 大学院特定課題研究の研究課題研究成果 報告書：森敦文学の可能性の探究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-04-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 明芳, 大石, 泰夫, 三井, はるみ, 星野, 光樹, 高橋, 大助 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000315

令和3年度 大学院特定課題研究の研究課題研究成果報告書

研究課題：森敦文学の可能性の探究

研究代表者：井上 明芳

共同研究者：大石 泰夫、三井 はるみ、星野 光樹、高橋 大助

研究成果

本研究は、森敦文学が内在的に有している可能性の探究を目的とする。周知のとおり、森敦は、自らが放浪した地を物語舞台とし、作品を描いている。とりわけ山形県庄内地方は、芥川賞受賞作「月山」をはじめ、多くの作品の物語舞台となっている。そのため、風習や風俗、方言など、庄内地方の文化も織り込まれ、極めて強い地方性を有する作品となっている。それらの中から本研究では、庄内平野全域を物語舞台とする晩年の大作『われ逝くものごとく』を取り上げ、森敦文学の可能性を探究する。

これまでも森敦文学については、文学としての研究を行ってきた。森敦の文学理論である「意味の変容」を元に、その理論展開を論理的に探り出すことを中心に、物語舞台の地理的な調査や庄内地方固有の語彙の意味、登場人物のモデルなど、現地に赴いて調査をしてきた。いわば、文学理論と実地調査と両面から森敦研究を進めてきた。

その研究を進めていく上で、庄内地方特有の風俗や風習や方言の調査については、文学研究の方法ではその専門性の違いから、踏み込みきれていないのが事実である。したがって、風俗や風習については民俗学的方法が専門的に必要であり、方言については方言学という専門性が要請される。そこで本研究では、文学、民俗学、方言学の3つの研究を活かし、それぞれの専門性から森敦『われ逝くものごとく』について、具体的に討究する。従来踏み込みきれなかった領域が専門的に明らかにされることによって、新しい〈読み〉の可能性が期待される。

一方で、本学文学部日本文学科には、日本文学、伝承文学、日本語学の3つの専攻が存している。この3専攻はそのまま大学院文学専攻の3つのコースへと発展している。これは前述した森敦研究への新しい研究をもたらす3つの分野に該当する。そうであれば、森敦『われ逝くものごとく』の討究は、日本文学科から大学院へ発展している3つの研究領域の横断性を探ることにもなるであろう。それぞれの専門領域という独自性を見出しながら、横断性を見出すこと、これが可能となるのが森敦研究であると言っても過言ではないであろう。また、『われ逝くものごとく』には稲荷大明神なども登場するため、神道学領域を加え、民俗学的領域の拡充を測った。

横断性を見出すとはいえ、隣接する研究領域ではあるため、閉鎖的になることは警戒しなければならない。そのためには、本研究の成果がどのように受け止められるのかなどといった相対的な観点が必要となる。その点を明らかにするために、文学教育の領域を接続させることとした。

そこで3つの研究領域を踏まえて、本研究は以下のメンバーで構成される。

文学研究領域、井上明芳本学教授（研究代表者）

民俗学研究領域、大石泰夫本学教授

方言学研究領域、三井はるみ本学教授

神道学研究領域、星野光樹本学准教授

文学教育研究領域、高橋大助本学教授

以上のメンバーと領域で本研究を展開し、『われ逝くものごとく』を具体的に取り上げ、森敦文学の可能性を探っていく。

令和3年度は、『われ逝くものごとく』について、井上がこれまで研究してきた成果を踏まえて、共有をはかりながら、改めて問題となるべき点を明らかにすることを目的とした。森敦の文学理論「意味の変容」で展開される内部+境界+外部=全体概念や近傍/域外といった理論が、『われ逝くものごとく』に適応されるとみなすと、地形的に庄内平野が物語舞台となることを論理的に説明できるようになる。

このテキストは庄内平野の港町加茂を出発点に始まる。これを起点Oと捉え、庄内平野の北限吹浦まで直線を引く。加茂-吹浦を半径として、起点Oを中心に円周を描くと、円内に庄内平野が収まる。円内は「意味の変容」では内部となる。つまり、庄内平野はこのテキストが論理的に形成する内部としての物語舞台なのである。この時、円外に位置するのが鳥海山である。したがって外部に属するのが鳥海山なのである。しかも鳥海山は生の象徴であるので、いわば外部が生、内部が死となることを示唆する。だから内部である庄内平野という物語舞台は、死の物語が語られることになり、タイトル『われ逝くものごとく』となっていることも頷き得る。

これは一例であるが、物語舞台が「意味の変容」理論で構成されているとすれば、そこで語られる内容もまた、内部/外部・境界の理論で考察することができるのではないだろうか。

この理論的考察を踏まえて、文学研究、民俗学研究、方言学研究はそれぞれどのようにこのテキストを読み解いていけるか。そのために見出しえる問題は何か。この点を明らかにせずに、研究を進めてもおそらくは感覚的な把握に終始してしまう恐れがある。とくに現地調査に赴けば、リアルな地のあまりに膨大な情報量に圧倒されてしまい、テキストが

リアルであるか否かという問題に収斂してしまいかねない。令和3年度を問題の発見に費やす理由である。テキストがリアルであるかどうかは、そもそも小説はフィクションであり、リアルではないため、問われるべき問題ではないと言い得る。しかし、庄内平野は確かにリアルに存在し、調査に赴くことができる以上、フィクションであることだけではリアルを拒否することはできないし、意図的に無視しても研究の自己満足に終わってしまう。であるならば、フィクションをフィクションたらしめている要因や理由、そこにリアルはどのような意味を有して関与しているのかを探る方が有益であろう。まして、民俗学的観点、方言学的観点が備わった本研究としては、リアルとフィクションの相関性を見出す方が、このテキストを捉え得る方途となるであろう。つまり問題の発見は、『われ逝くものごとく』をリアル／フィクションというどちらかを内部とすればどちらかが外部となるといった森敦の文学理論の確認を行うことであり、それをテキストに見出していくことになるのである。

テキストにそれぞれの専門性を活かして問題を見出し、それを共有するために会合を開き、挙げられる問題を皆で検討しながら、洗練させていった。さらに現地調査に行き、現地の黒井拓也氏をはじめとする森敦研究を行っている方々と交流し、現地ならではの感覚や知見を伺い、問題に取り入れていった。

それらの諸問題について、文学研究分野を井上と高橋が、民俗学研究領域を大石が、方言学研究領域を三井が、神道学領域を星野がそれぞれ分担して執筆した。以下にそれを掲げる。

1、文学研究領域（井上明芳・高橋大助）

文学研究領域と文学教育領域からは以下の点が問題として挙げられる。

(1) 『われ逝くものごとく』本文の〈読み〉をどのように行うか。

(2) その〈読み〉に従って、現地調査を行う意味を問い直す。

(1) として挙げたのは、『われ逝くものごとく』本文をどのように解読していくかという〈読み〉の行為について考察することである。むろん、物語内容をどう解釈するかというわけではなく、読解する者が読み取ろうとする時、どうしてもその恣意性を排除することができない。ということは、読みたいとように読んでしまっている可能性があるということの意味する。それはさらに読み取り得ていない可能性を生じさせるということでもある。そうであるならば、読み取り得る／読み取り得ないという相対的な状態を本文にいかに見出し得るかという点こそ問題になるであろう。

そう言い得るのは、現地調査にいくと、物語内容にしたがって現地の風景を見るという

ことをほとんど無意識に行っていることに反省させられたからである。確かに庄内地方に行くのは『われ逝くものごとく』について知見を深めるためであるから、現地を眺めるのは物語内容に従うのは当然とは言い得るであろう。が、現地はまさしく現地そのものであって、物語内容のために存在しているのではない。とすれば、本来はテキストと現地は異なっているはずであり、物語内容に合わせて見るということは、見たいものを見るということになっているのである。これをテキスト本文に重ねた時、見たいことすなわち読みたいことであることに気づく。それは、見ようとしなかったことすなわち読み取ろうとしなかったことを生じさせていることに気づくことでもあるのである。

これを問題として顕在化させるために、計量テキストマイニングという方法を用いて、『われ逝くものごとく』本文を分析する。具体的には KH coder (樋口耕一氏作成) を用いて行い、このテキストの語の出現率や文脈形成など、できるだけ〈読み〉の恣意性を除いた本文形成の状態を把握し、すでに気づいていること、読み得ていることの確認のみならず、気づいていなかったこと、読み得ていなかったことを明らかにする。

この結果を踏まえて (2) 現地調査を行う意味を問い直す。(1) のように〈読み〉が考えられ、計量的な分析で結果が出れば、現地調査にもこれまで見出し得なかったが見る必要のあった風景や地形があると推測される。この結果を踏まえて、改めて論理的に形成されている物語舞台としての庄内平野という意味を刷新する。それは、テキストのフィクション性が見出し得なかったリアルによって形成されていることを示唆し、読み得なかった内容がフィクションに含まれているのであれば、改めてフィクションの意味を問うことにもなり得るであろう。つまり、『われ逝くものごとく』を従来言われている小説というジャンルの枠組みで捉えられるのかということをも問うことになるのである。本研究を以上の問題を踏まえて今後深めていく予定である。

2、民俗学研究領域 (大石泰夫)

森敦の庄内地方を舞台にした文学は、方言が満載で、地域の習慣の表現が満ちあふれている。もっとも、方言といってもその地域に育ったものでなくとも理解できるような表現となっているであろうし、生活習慣も同様にそんなに突飛なものは省かれているといえる。

民俗学は生活習慣を研究対象とするものであるが、単に文学に表現されている民俗事象を説明したり、文学に表現されているものから生活習慣を読み取るだけでは、文学と民俗学を切り結ぶことにはならないだろう。

文学は心の有り様を表現するものであるとするならば、そういう部分の理解にいささかなりとも役に立つものを取り上げるべきだろう。

以上のことから、当面課題として考えるものを列記すれば、

(1)「鉄門海上人」に対する庄内地方の信仰

(2)「西目」という外から知恵を授けるものの存在

ということになる。

以下それぞれについてコメントしたい。

まず、(1) についてであるが、鉄門海上人は即身成仏で名高くなったが、出羽三山信仰を持ち伝えて全国を行脚した宗教者である。巡行する宗教者、とりわけ修験者は西日本では熊野、東日本ではこの出羽三山が広域の信仰を今日でも伝えている。また、鉄門海上人については、庄内地方にもその名を刻んだ石碑が多く残されており、その信仰が篤かったことが知られる。作品冒頭、多くの人を苦しめた加茂坂の改修を推進したことも記されている。特にこの小説で描かれているのは、子授けの祈願である。長いこと子どもに恵まれなかった「じさま」が、鉄門海上人に祈願し「だだ」を授かる。その「だだ」が戦死したと聞かされ、鶴岡の「神様」を訪ね、注連寺まで訪ねていくということが描かれる。子授けの祈願は日本人にとって、もっとも切実で根源的な祈願である。それが鉄門海上人に対する信仰として、この作品は描いている。庄内地方での鉄門海上人に対する信仰を描き出すことで、別の読みの展開が考えられる。

次に、(2) だが、「西目」と呼ばれる存在がもたらす知識が、「さき」に大きな影響を及ぼしている。民俗的なムラにとっては、伝承されてきた知識が生きていく上での最も重要な知識と考えられてきた。しかし、実際にはいろいろな形での知識が外部からもたらされ、それが民俗に変化をもたらししていく。この作品においては、「西目」と呼ばれる存在がそれにあたる。森は何故、こうした存在を付置したのであろうか。それを現地調査から考えて見たい。

3、方言学研究領域（三井はるみ）

(1) 文学作品の方言

一般に文学作品中に方言が用いられるのは、そこに存在する方言をそのまま写すことが主眼ではなく、文学的な創造へのなんらかの寄与を期待してのことであろう。例えば、方言によって作品の中に雰囲気や味わいを盛り込んだり、登場人物やその周囲の生活を生き生きと描き出そうとすることなどが考えられる。したがって文学作品の中の方言は、必ずしも実際に地域社会で話されることばそのものではなく、様々な程度に作家の創造的な取捨を経たバーチャルな存在であると言える。

(2) 方言を書いて読むこと

他方言の性質に目を向けると、「方言を書いて読む」ことにまつわる次のような問題がある。

- ・方言特有の音声は通常の表記方法では表現できないことがある。表記できても、忠実に文字化すると文章としては読みにくい。
- ・方言特有の語彙や文法形式は、標準語訳を付けるなどの工夫によってある程度は対応できるが、読みにくかったり理解の妨げになる可能性がある。
- ・対象方言が作家の母方言ではない場合、母方言話者の協力を得て創作するにしても、ありのままに再現することは難しい。方言形の細かな意味用法、類似表現の使い分けのほか、話の組み立て方、相手への働きかけ方、話題の選び方なども方言によって特徴があるので、標準語を直訳しただけだと当該の方言らしさが損なわれる場合がある。

(3) 研究課題

「方言を書いて読む」ことの制限の中で、作者の創造の実現として、どのような「方言」が用いられているか、という観点から、『我行くものごとく』に使用されている「庄内方言」について検討することが基本的な課題である。問題は多々あるが、まずは確実に言語形式の面からアプローチする。

- (1) どのような言語要素に現れているか。発音、語彙（人称、指示詞等）、文法形式（用言の活用、格助詞、副助詞、接続助詞、終助詞、ボイス、テンス、アスペクト、肯否、推量、意志・勧誘、命令・禁止、質問・同意要求等）、感動詞（応答、あいさつ等）、慣用表現など。→使用されやすい言語要素に傾向があるか。
- (2) 使用されている「方言」が庄内方言を反映したものかどうか、方言の記述研究、辞書等で調査する。→庄内方言ではない「方言」の混入があるか。
- (3) 頻出する文法形式を取り上げ、どのような意味用法で使われているか、記述研究と照らし合わせて確認する。→食い違う場合、どのような食い違いか。
- (4) 登場人物によって違いがあるか。
- (5) (3) で取り上げた形式について、隣地面接調査によって、現在の実際の庄内方言での使われ方について確認する。
- (6) (1)～(4)の傾向は、作品における方言使用の意図とどのように結びつくか（あるいは結びつかないか）考察する。

(4) その他

作品中には次のように、言語行動・言語随伴行動に関する記述が見られる。これらの検証も課題となりうる。

- ・それにしても、言葉は庄内弁なのに発音は標準語なのです。やがては言葉の庄内弁もなくなってしまうでしょう。(文庫版 p.818)
- ・上海はもとのように標準語ですが、発音はすっかり庄内弁に戻っています。篤農家のだとは反対なのです。(文庫版 p.820)
- ・バスが停まって、行李を背負った富山の薬売りらしい男が乗って来ました。「アアッ」と顎をしゃくって、頭を下げるのではなく上げるのです。これが庄内地方の背を丸めて荷を背負う者の挨拶で、富山の薬売りは言葉はむろん、こうした挨拶の仕方まで真似て、庄内地方に同化したつもりでいるのです。(文庫版 p.402)

さらに、本研究ではおそらく扱うことができないが、日本社会全体の方言をめぐる状況の変化の中で、本作品が方言を取り入れた言語作品としてどのように位置づけられるか、ということも課題になりうる。本作品が発表された1984～1987年頃は、全国の地域社会において共通語の浸透による方言の衰退が明瞭になった時期である。そしてそれと表裏をなすものとして、日本社会における方言というものへの価値評価が、それまでのマイナス基調からプラスに転じつつあった時期でもある。自治体等が方言を地域の表象として利用したり、方言を温かみのあるなつかしいことばとする言説が一般化し始めるのがこの頃である。本作品がどのような形で時代を反映しているのか(いないのか)、方言を使用した他の文学作品や、演劇、ドラマなど他ジャンルの言語作品と比較しつつ位置づけを考えてみたい。

■参考文献■

- 磯貝英夫(1981)「日本近代文学と方言」藤原与一先生古稀御健寿祝賀論集刊行委員会『藤原与一先生古稀記念論集方言学論叢Ⅱ：方言研究の射程』三省堂
- 木下順二(1982)『日本語の世界12：戯曲の日本語』中央公論社
- 言語生活編集部編(1956)『言語生活』61、特集：現代文学と方言
- 田中ゆかり(2021)『読み解き！方言キャラ』研究社
- 都染直也(1993)「生の方言／脚色された方言」『月刊言語』22-9
- 村井源・松本斉子(2022)「日常会話と物語会話の比較：文体と語用論的機能の観点から」シンポジウム「日常会話コーパス」VI(2022-03-07)ポスター発表
- 村中淑子(2020)『関西方言における待遇表現の諸相』「第2章 小説を用いた方言研究手法について」和泉書院
- 脇忠幸(2016)「方言で語るということ —「方言コスプレ」から見る井伏文学—」『人間文化学部紀要』16

4、神道学研究領域（星野光樹）

本作品では、庄内地域における大小さまざまな神社や寺院が登場するが、湯殿山神社、大物忌神社は、登場人物の通過儀礼の場としての位置づけが与えられている。

湯殿山神社については、「男十五になればだれもが詣る」（35頁）とあるように、当地においては男子15歳の成人儀礼として、湯殿山に参詣することが説明されている。また、一般の参詣については「ほとんどが宝冠をかぶり、白装束に身を固めているが、仏として合掌する者もいれば、神として拍手をする者もいます」（73頁）と記しており、15歳の参詣の場合も、このような形に準じて行われたかもしれないが、湯殿山神社では、明治以降、神仏判然令や修験道の廃止といった一連の政策をうけ、出羽三山神社に統合されて以降、当社では修験道・仏教が流入する以前の、いわゆる復古神道に基づく教説や作法が広められた経緯がある。こうした神社の変革期を経て、作中ででてくる庶民の参詣が、当時どのように神社、或いは社会において説明され、信仰的实践の場として成立していたのかについて、検討を試みたい。

また、大物忌神社については、あねま屋夫婦とさきの3人が吹浦を訪れ、大物忌神社（鳥海山大物忌神社）に埋葬を依頼しており、「姫とか命とかある墓石が、疎らながら仲良く寺の墓石と交じり合っています」（448頁）、また、同墓地が「半分は神道の墓だが、海禅寺の境内とも言えるのです」（763頁）とあるように、当時の海禅寺では、半分が神道式の墓が存在し、作中にその描写はないものの、神職による葬儀（神葬祭）が行われたものと推測される。近代以降、鳥海山大物忌神社や出羽三山神社に焦点をあて、庄内地方の神社の神葬祭の実態について検討したい。

このほか、「荒倉山の出羽神社とともに、ここに加茂神社が勧請された」（8頁）とある加茂神社や鶴岡天満宮の祭礼と思われる「日枝神社の化けもの祭り」（111頁）の由緒についても考察を加えてみたい。

以上、それぞれの研究領域から問題を提起し、『われ逝くものごとく』の有する可能性を今後探究していく予定である。その成果は精査の上、WEBサイト「森敦文学研究の世界」（https://www2.kokugakuin.ac.jp/i_wrks/）に掲載予定である。